第二章　幼き日

一、父と母の結婚

昭和五年四月、父静男のところへ母多賀（たか）が嫁入って来た。父三十四歳、母二十五歳、当時としては二人とも晩婚であった。父と母の結婚が決まったころは、父の妹小丈は諏訪の人で東京に海苔・茶問屋を営む中澤家へ嫁し家を出て、静男は療養先より戻り、母ますと二人、小さな地主とし自作の農業、青年団活動などしていた頃であった。

多賀を宮川の家にお世話下さったのは遠縁に当たる上垣外のひさ江お祖母様であった。縁談話に静男は多賀の家の名を聞いて賛成したという。仲人役は本家千治、い乃夫妻にお願いした。

しかし、結婚以来二人は、あまり心の幸せな生活ではなかったようだ。

姑のますは、まだ下久堅村の頃、一番最初に郵便局を始めた家の娘で、明治の嫁で自分が三十五歳の時に夫の磯太郎に先立たれ、苦労を重ねて来た人で、良い人柄ではあったが明朗という程ではなく、嫁多賀とも気軽におしゃべりする方ではなかった。普段母は殆ど

着物を着て生活した人で、父は病身ながら一生懸命農業をしたが、母は百姓仕事はあまり得意な方ではなかった。母は政治的にも文学的にも開放的な栗矢の実家の家風と違う、小地主的の質実な堤屋の生活に馴じめず、家事のあまり得意でない人であったので、父は物足りなさも感じていたようだ。子宝にも恵まれず四年が過ぎた。

二、啓子誕生

昭和九年七月十日、夏の暑い昼下がりに、伍和栗矢の原家の御隠居の一部屋でわたしは産声（うぶごえ）をあげた。体重三〇〇〇グラムを越す健やかな女児であった。待っていた我が子の誕生、父は大変喜んだ。「わしは弱いので多分子どもは一人だと思う。この子が大きくなったら『堤屋の子を見たか』と人の噂（うわさ）するようないい子に育って欲しい」と栗矢に駆けつけたときに周囲の人に話したという。

両親と啓子

この月、海軍大臣岡田啓介内閣が成立。父は岡田啓介の一字をもらい「啓子」と命名すした。わたしはこの名前が好きで、名付けてくれた父に感謝している。

母は身籠っている時、悪阻が大変ひどく、母の叔父原農夫の経営する飯田病院へ入院した。その時叔父より「もう一日入院が遅ければ死ねたのに」と言われたと、わたしが成長してから母が話してくれたが、わたしの出産はそれほど難産だったのだろうが、そうなっていれば、わたしはこの世に生を受けることなく、堤屋の家も継承できなかったかもしれない。そんな気持ちも働いて、叔父一流のこの諧謔はあまり快く思わなかった。

この地方では初節句のお祝いに、母方からお雛様一揃いを贈る風習がある。しかし当時の栗矢原家では前述のように雛を贈る余裕がなく、この地方では有名な、これも遠縁に当たる大平小州画伯が九右衛門翁に贈った内裏雛の掛物を、初節句のお祝いにいただいてきたと聞かされた。現在ではかえって雛一式よりうれしい。四月三日の雛祭りには、親戚からいただいた雛人形を飾り、その上に、この掛物を掛けては母や栗矢の思い出に浸っている。

三、幼い頃の生活

宮川の家では、祖母は冬仕事に何枚か藁の莚を織り、春先からの田畑の仕事が一段落する六月になると、一人で家に添う道の南側の土手に植えてあるお茶の木の茶葉を摘み、長屋下で釜で蒸し、それを冬に織った新しい莚の上に拡げ、手で丁寧に揉み、二階の蚕室の

目棚に干して自家製のお茶をつくったものだった。

母は母で、二階に据えてあった機の前に坐り、冬の間祖母に教えてもらった機織りで、簡単な縞の反物や巾の狭い帯にする布の裂き織りなどをしていた。織り糸はどうしていたのか――、草木染めの他、家で飼った蚕の玉繭（二匹の蚕が共同で一個の繭にしたもの。養蚕をしていると二～三％の割合で必ず出るが、繭から二本の糸が出るため、糸をつくるときに必ず絡まってしまいきれいな糸が作れず、通常はくず繭の扱いをされてしまう）で真綿のチョッキなどを編んでいた。時々、近所から頼まれ、着物や羽織を仕立てたりもしていたし、わたしの着物類はみな母が仕立ててくれた。川路のよね叔母様が母に寄越した便りに「これから反物を織り、病院の正ちゃんのお祝いにあげるように仕上げなくてはならない」などと書かれた手紙があったりする。今のように何でも買ってくるという消費生活は都市部のごく限られた人びとの贅沢であって、農村はもちろん飯田の近在の地主層の家々でも高度経済成長期以前は着る物から食べ物、衣食住すべてにわたってまだ自給自足的生活が主流であった。宮川の家も例外ではない。女所帯が長かったので、並以上に慎ましやかに暮らしていたのではないだろうか。母もそうしたこの家の風に慣れ、祖母と父とわたしの四人家族の生活が、日一日と紡がれていった。

父はあまり丈夫でないため、近くの西田の千広さんという方に、農仕事一切、山仕事を

お願いしていた。わたしがものごころつくようになり、そして主人が堤屋宮川の家に来てくれるまでは我が家のほとんどの仕事を千広さんに手伝ってもらっていた。南原の「西」の次男で、父より幾つか若く、近くに分家していた。父が東京から戻り、百姓をするようになったとき、三枡屋の恒夫様が「静様（父のこと）、西の息子がみやましいで、頼みな」と教えてくれて以来、お願いするようになったとのことである。

千広さんは、実直で勤勉、努力家のよい人であった。父は百姓をするようになってから『富民』という雑誌を購読していたが、千広さんも父の読んだ後で『富民』を持って帰り勉強していた。この洞の田んぼ半分は千広さんに貸してあったので、あとの半分の田や畑、山などの仕事も一切お願いしていた。千広さんには、上に女の子がおり、続いて昭和十一年に男の子が生まれた。茶飲み話に父が「姓名判断で三郎というとてもいい名前がある」と千広さんに話したら、その長男に三郎と命名したと、母から聞いたことがある。本家から土地を少しもらって分家し、六人（幼少で一人亡くす）の子宝に恵まれたが、五十歳代で亡くなってしまった。

養蚕など忙しい時には、お隣の和子さんという少女を子守に頼んだという。「啓子は和子さを見ると泣いて仕様がなかった」との話がある。近くの文永寺は子どもたちの集るところで、子守を頼まれた和子さんも気楽に遊びたいので、幼いわたしを背中から下ろして

境内の大きな石臼に木の蓋をかぶせて据え置いた。置いて行かれる感じが怖かったので、わたしは泣いたに相違ない。その思いが習慣となって「和子さを見ると泣く」という先の話になったのだろう。

また五歳頃だったろうか、祖母に連れられ、お握りを持って文永寺のお経堂へ遊びに行った。同じように祖母に連れられ遊びに来ていた同じ年の豊夫少年とお握りを分け合ったりして遊んだ。何もまだ分らぬわたしは、斜面の多い家の周りの自然の中で楽しく遊んでいたのだと思う。

四、父の死

父の病が重くなり、お座敷の床に寝ているばかりになって来た。栄養を摂らなくてはと、当時は贅沢品だった卵、バター、牛乳などを父だけが食べていた。松葉酒のような飲み物もあった。金木犀の香りが漂い始めた昭和十四年十月五日午後、祖母とわたしで長屋の前にある甘柿を採っていた時、母の大きな呼び声が聞こえたので、あわてて父の枕元へ駆けつけた。このとき天井で大きな音がしたということだが、わたしは六歳だったのであまり覚えていない。父の死だった。多量の喀血の跡が目に焼きついている。

母と祖母はどんなに悲しかったことか……。とりあえず、我が家のすぐ下方に位置する

本家清中屋と、父の叔父（和一）が養子に行っている三枡屋とへ知らせなくてはならない。まだ電話もない当時であるから、祖母と母が「啓子をお使いにやってみるかな」と話し、「お父ちゃんが死んだのですぐ来ていただきたい」と言うように頼まれて駆け出した。途中下の車屋というお店（青島商店）のところまで行くと、小学校帰りの三人の女の子にとり囲まれ「啓ちゃは生意気だで行かせないようにする」と三人手をつないで、行く手を遮（さえぎ）られた。その時はちょっと悲しかった。

「何しに行くのだか言え」「お父ちゃんが今死んだので知らせに行く」「それなら行かせてやる」と通してくれて、知らせに行くことができた。

葬式には大勢の方たちが集まってくださった。わたしは「奇麗なお花が一杯あるのに、なぜ位牌を持たなければいけないのか」と思った。

葬儀の日、父が学生時代下宿をさせて頂いていた東京の本屋の林五郎さんがお見え下さり、とても大きなお人形を頂いた。わたしはうれしくてうれしくて、永く大切に慈しんだことを覚えている。

五、父の背中

父は病い続きで早逝したが、大山郁夫（早稲田大学教授、労農党初代委員長などを務めた政治家）、長谷川如是閑（本名は萬次郎。日本のジャーナリスト、文明批評家、評論家、作家。明治・大正・昭和と三代にわたり、新聞記事・評論・エッセイ・戯曲・小説・紀行と約三〇〇〇冊もの作品を著した。大山郁夫らとともに雑誌『我等』を創刊し、大正デモクラシー期の代表的論客の一人）らと交際があった。地元へ帰ってからも青年団活動、昭和四年の天龍水電南温送電線工事の補償などに力を尽くし、南原区の井水改良工事なども積極的に行った。また羽生三七（下伊那郡鼎村出身。大正、昭和期の日本の政治家。日本社会党参議院議員で「参議院の良心」と呼ばれた論客）なども父のもとに勉強に訪れている。父を知る地域の古老たちは異口同音、頭がよく腰の低い、面倒見のよい人だったと言って下さる。わたしは幼く何も分らなかったけれど、そんな父を持って誇りに思う。

手元に昭和八年から昭和十一年にかけて「下久堅時報」に書いた父の文章の写しがあるが、それ読むと、若き日の父が見据えていたものや、思うに任せぬ病軀を抱え鬱々（うつうつ）としている父の姿が彷彿（ほうふつ）とするのである。

原稿のペンを執る度に、私は自己の不勉強なる現在が託ちられてならない。最少しく時間に余裕のある勉強の可能な生活が羨ましい。二六時中自家と世俗の事柄に奔走して自己への省案が十全ではなく、且つ読書の時間も全々欠けてゐる今日の生活は凡てが嫌悪の心持を誘ふてならない。

殊に私の如く死線に接続した体躯の持主は健康な人々の生活に看る如く、その生活を敏活に且つ朗らかに行動し難いのである。晝中、労働にあつて後、夜分遅く迄も床に就かないでゐると、もう体の平調が狂ふて来る従って晝中に辛じて健康人の殿に伍してゆくと夜分は充分の休養が與へられなくては翌日もう駄目の体になつて終ふ即ち緊張性に於て零であつて丁度半裂の入つた茶碗とて熱湯が注ぎ得ないのである。世俗に出て五年を過した今日私は自己の健康さを省みて、日毎に拡大されていく生活環境にこの健康さが添い難い事が切実に覚へてならない従って最少しく環境の吟味を厳しくして生長的方面のみに局限しなくてはならない。現在の生活相をそのまま存続してゆく時は決して健康は保ち難いのである。

然し人は積極的でありたい。自己の意の走るまゝに、生活圏が拡大さるゝ儘に活動したいものであるが私の今日はそれが許されない。昔、二十四時間徹夜して読書しても何等体に疲労もなく反つて頭の冴を覚へた頃が懐かしい。

私が学舎の課程を卒へて尚居残つたのも、つとめて読書の生活が続けたい、出来得ば読書と生活が一致し得る方面に職を求むべく心掛けてゐたのである従つて現在、弱い体を擁して只々生活のみに追うはれてゆく今日程味きない生活はない。世俗の実務に当自家の農業経営に於て知らねばならぬ常識さへ欠いてゐる且

つ知り度い事柄が眼前にウズ高く続いてゐるにも関はらず、研究への時間は更に求め難い事は農村の現在の機構より看て致し方ないとは云うえ不満の事柄である。（後略）　（宮川静男「随想」　昭和九年五月十日「下久堅時報」第二十二号）

身体が思うに任せぬ分、父は村の広報紙とでもいうべき、その思索の捌け口として「時報」によくペンを執ったようである。「下久堅群落性の一考察」「下久堅は丙の下」など啓蒙的論調が当時どう受け取られたか一抹の不安はあるが、大局的な高所から地域の活性化と発展を願った父の言葉が、わたしの胸には伝わってくる。

父の没後、母方の親戚で、父の親しくしていた伍和の千葉直視さんの日記の写しをいただいた。

今日は遂に宮川さんの訃報に接した。駄目なのかも知れぬとは思ってゐたけれど、はっきりこうきまると耐え難き哀情にかられる。読書中に「人の厚情は病んでみると知れる」と云う意味の事があり、それを読みてより自分の心をえぐられた様な気がして絶え難かった。

宮川さんが全く倒れ込んでよりはもうなかなか長い事である。それだのに自分はたゞの二回しか見舞っていない。去年は行ってお百姓、主に稲作りの事を教はって来た。稲を作る事について更に知識のない自分には宮川さんの話は実に有り

難かった。そしてそのお蔭で苗代の事などもうまく出来た。
　ずっとそのまんま気になりながら横着してゐて八月の末にリンゴがとれたので、それを持って行って来た。　もうその時は茶菓など食べられる状態では無かった。然し非常に喜んで下さった。
「この前は直視君が来てくれたら熱が下がったから、今度も下がるかも知れん」なんて、云ってゐた。病勢は今考へるとずっと進んでゐたのだらう。下痢が続いて悩まされてゐた。肺病より胃腸の方が恐ろしいと云ってゐた。
　医者も薬も断って、もう自然にまかしたと云ってゐられた。自分も「それが一番いゝ」と賛成した。
　治ほるものならきっと良症の働きで治ほるでせう。宮川さんも、俺の様な何も悪い事をしない者はまだ死なないなんて云って笑ってゐた。
　茶も所謂滋養も断って自然にまかせきると云ふのは云ふ可くして到底あの場合の様な切っぱ詰った状態に於て平然とは出来ないものではなからうか。（余程の人でない限り）自分はその時実に感心した。（中略）自分はまだ「動じない」と云ふ心境が出来なくて駄目だなんて話したら、そうした事はなかなか云ふ可くして難い事だと話してくれた。

　加藤清正が千利休の茶席に這入って、刀を持ってゐるなら利休がそんなものを何故持ってゐるかと問ふと、これは武士の魂である故に放す訳には行かぬと答へた。利休はそのまゝだまって聞いてゐたが収刻になり不意に煮えたぎる茶釜をぶちあけたそうだ。すると客人皆大驚きにその座をとびたった。清正も刀を忘れてとび逃げたと云ふ。遂利休に武士の魂ならば刀をおいて逃げるは何事だとしかられたと云ふ。こんな話をしてくれた。
　平常心と云ふのはさ程にたやすいものではない。宮川さんがよくこの場に立到り平静にありしを今亦強く関心せざるを得ぬ。
　自分と宮川さんとはそれ程に親交があったと云ふ訳ではないけれど何故か話し度い亦話せばわかってくれる実に通じた人であった。自分には兄貴の様な感じがしてならなかった。
　自分が行けば実に心よく迎へて瀕死の床にありながらよく話して尽きる事を知らなかった。「よく働くっちゅうなう」とほめてくれた。宣伝ばかりよくて慚愧に耐えなかった。（中略）
「抱朴含眞」と云ふ額があったから百姓にはよい言葉だと云ったら、これは海舟の書だと云ってゐられた。

去り難かったけれど別れて来た。それが遂最後であった。あれから一月の少し余でもう泉下の客となられてしまった。

ゆったりして死ねたらうかと案じている。お家内の事、子供衆の事、心配せずにはゐられないのではなからうか。（後略）

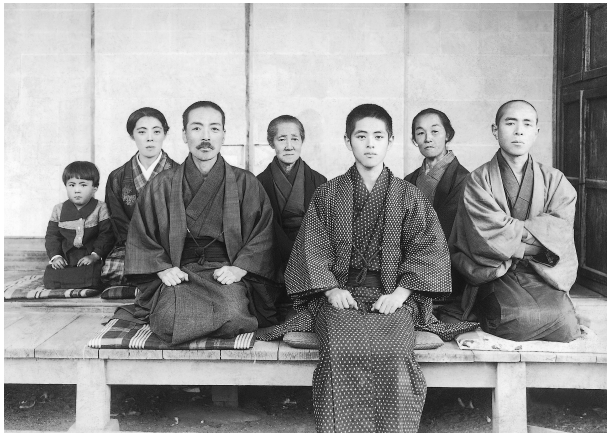
父の訃報に接した直視さんの思いもありがたいが、それ以上に、病床にあった父の面影が窺えて、わたしには懐かしい。

六、母の思い

父亡き後は、前からもそうであったが少しの小作料、有価証券、自ら耕作する土地からのわずかの収入、山林竹林の伐採代金などで暮らすことになった。

飯田市歴史研究所の坂口正彦研究員が自宅にある古文書や資料をもとに調べてくれた報告書によれば、磯太郎時代の「お金や家よりも土地」という蓄財の方針で、昭和十九年時点は南原集落一の土地の所有者であったらしいが、祖母と母はわたしには何も言わなかったけれど女三人の暮らしはなにかと心細い思いだったことだろう。三枡屋へ養子に行った和一叔父が宮川の家の実質的な後見人として色々の相談に乗ってくれ、大変ありがたかった。

母は就学前のわたしを連れ栗矢の実家によく里帰りした。歩いて国鉄飯田線の駄科駅まで行き、電車で飯田駅へ、そこから乗り合いバスで駒場まで。駒場でバスを乗り換えて終点の栗矢まで行き、そこから少し歩くと実家へ着く。母の里帰りは、早すぎる夫の死の悲しみを癒すためだったと思うが、わたしにはうれしいことだった。



母・ますの生家で

わたしの生まれた御隠居に下宿されていた伍和小学校の吉川伝先生のお嬢さんである今は亡き裕美代ちゃん（後に、市田の木村喜久雄先生に嫁す）、親戚の大畑の恭ちゃん（現医療法人栗山会理事長・飯田病院院長）と精一杯遊んだ。その頃の栗矢は母の兄弟姉妹も仕事やら結婚やらで次々と家を離れ（義祖母ちひろが嘉子叔母を連れ実家へ戻り、静枝叔母は稲武町の古橋家に嫁し、昌二叔父が東京日立製作所勤務、菊夫叔父は転勤族の教師）、曾祖母（ひろえ）と祖父（準平）二人でひっそりと暮らしていた。長女の母にしてみれば、お手伝いにおばさんが来てくれるものの、寂しくなっていた生家を見舞う意味もあったのだろう、栗矢では何泊

もして来た。気丈でおとなしい宮川の祖母は淋しくなった家を一人守って居てくれる日が多くなった。

一方で、我が家には、毎年のように夏休みになると、東京から従兄で同い年の修ちゃん、その姉の繁ちゃんたち家族が来て長逗留（ながとうりゅう）していた。下の大井を堰（せ）いで水遊びをしたり、向こうの小川でめだかや、どじょうを採ったり、野山を駆けめぐって遊んだ。

いとこたちと

普段慎ましやかにひっそりと暮らしている宮川の家も、夏の向日葵が咲いたようににわかに明るく賑やかになり、祖母や母も元気づけられていたように思われる。

第三章　学生時代

一、国民学校の頃

わたしは、昭和十六年四月に下久堅国民学校へ入学した。

校長は宮下功先生といった。百余名の入学児童は明組、正組の二クラスに分けられ、わたしは明組。担任は師範出の倉田利久先生という二十七歳の若い先生であった。

東京より繁ちゃんのおさがりのハイカラな洋服をたくさん頂くので、その中から着せてもらい、母の妹で愛知県稲武に嫁いでいる叔母から頂いた上等のランドセルを背負い、母に連れられ入学した。

級友に宮下校長先生の次男信彦君がいた。彼もお母さんに連れられ来ていたのだが、驚いたことに彼のお母さんと母は女学校の同級生で、大正十一年三月女学校卒業以来の出逢いであった。信彦君のお母さんはこの学校の校長夫人、かたや母は夫に先立たれ、未亡人となってわたしを連れて行ってくれたのであったが、なんとも吃驚（びっくり）した出逢いであったと後々まで語ってくれた。